

考える人



plain living & high thinking

平成18年4月1日発行 第二種郵便物認可
平成18年4月1日発行 年4回255円(税込)発行
No.16
季刊誌 2006年春号
2006 Spring Issue



対談 養老孟司×内田樹
新連載 湯川豊「須賀敦子を読む」

特集
直して使う

sempe

COUNTER AME

Vol. Five : Montana Big Sky Country

カウンター・アメリカ

渡辺靖文、撮影

text and photographs by Watanabe Yasushi

⑤ モンタナ ビッグスカイ・カントリー



ビッグスカイ・カントリー

コロラド州デンバーからモンタナ州ボーズマンへの夜間飛行。懐かしいエンジン音とは裏腹に、眼下には静寂の暗闇が果てしなく続く。時折垣間見える灯りは人里なのだろうか。その遅く温かく、そして同時に、とてつもなく疎く孤独な輝きに、思わず人間の存在そのものを重ね合わせてしまう。普段はごまかしている己の生き様と正面から向き合うことを迫る、そんな敵かな時間が流れてゆく。やがて、灯りの密度が濃くなり始めたとき、着陸に向けた飛行機の気圧の高まりを感じ始めた。

ボーズマンのギャラティンフィールド空港は、山小屋をイメージさせる洒落た造りだ。気が付けば周りは白人ばかりで驚くが、完璧なアウトサイダーでいられるのは、どこことなく気も楽だ。早速迎えに来てくれたホテルのスタッフのパンへ乗り込む。何と、そのパンはターミナルのすぐ外で、無人のまま二十分近くもエンジンをかけたままだったという。真つ暗な直線の道を飛ばしている、このまま空に舞い上がってしまうような感覚に襲われる。チエック・インしたホテルの部屋からも、五百メートルくらい先に見える灯りと満天の星以外は何も視界に入らない。今夜はこのまま、カーテンを閉めずに眠りにつくことにする。

朝焼けとともに目の前に現われたのは、広大なオープン・フィールドと、遙か彼方に連なる美しい山々。そしてモンタナの愛称である「ビッグス

RICA

クレージ・マウンテンの麓に広がる、リ
ック・ジャレット氏所有の牧場。広がる青
空、彼方に連なる山々、見渡す限りの牧草地。



わたなべやすし
慶應義塾大学環境情報学部
教授。一九六七年生まれ。
上智大学外国語学部卒業後、
ハーバード大学大学院修士
ならびに博士課程を終了。
ケンブリッジ大学、オクス
フォード大学客員研究員を
経て、二〇〇六年より現職。
専門は文化人類学、文化政
策論。アメリカ研究、ボス
トンの上流階級、フアイリッ
シュ・コミュニケーションでのフ
ールドワークをまとめた
デビュー作『アフター・
アメリカ』(二〇〇四年五
月 慶應義塾大学出版会)
は、同年のサントリイ学芸
賞(社会・風俗部)を受
賞した。

「ビッグスカイ・カントリー」モンタナは、全米有数の農牧州。
そこで人々は地を耕し、牛を育て、穏やかに豊かな生活を営んでいる。
しかし近年、誇りと伝統の源泉だった農牧業は、市場の論理に振り回され、
土地は転売され、牛は不自然に育てられ買いたたかれていく――。

危機感を抱いた地元農牧業者たちは、「顔の見える農業」を目指し地域で連帯、
農牧場の協同組合を組織して、そうした現状を打破しようと努力している。
現実と理想の狭間で揺れる、カウボーイたちの生活と意見。